

研究ノート

安心に関する文献検討 —子育て中の母親への適用に向けて



小林 孝子
滋賀県立人間看護学部

子育て中の母親から安心という言葉がよく聞かれ、少子化対策でも達成すべき重要な目標とされている。安心は多用される言葉であるにもかかわらず、その明確化がされてこなかった。本研究の目的は、国内看護学領域の文献検討により安心の概念を明確にすることである。学際的な論文6件と一般図書14件を分析し、看護実践に関する文献22件の分析を行った。

学際的な側面から安心を分析したところ、安心の特性として「心が安らいでいる」「安定している」「信頼が築かれている」「安全が保障されている」「できると信じている」「求めるもの」「主観的なもの」というカテゴリーが明らかにできた。一方、国内の看護実践の文献で示された先行要件として「信頼関係をつくる」「受容する」「そばにいる」「情報を提供する」「環境を整える」、属性として「受け入れられている」「つながりがある」「信頼できる人がいる」「できる感覚がある」「不安がない」、帰結として「充足」「回復」「安定」「関係性の構築」「自立」というカテゴリーが分類された。看護実践の文献においては、看護職と対象者間の信頼関係、対象者ができると思える関わりが重要であり、母親のポジティブな側面のひとつとして安心に着目した働きかけを行うこと、看護援助のアウトカムとして定義づけられることが必要であると考えられた。

キーワード 安心、子育て、母親、文献検討

I. 緒言

子育て中の母親からの相談に応じていると、「安心しました」という言葉とともに母親の表情が和らぐ場面に出会うことがある。育児相談会に参加した母親は相談することによって安心し¹⁾、妊娠中は助産師や他の妊婦や乳児との交流²⁾や子ども虐待予防を目的とした育児グループに参加した母親の経験として安心感が挙げられている³⁾。また保健師が母親との信頼関係を構築する段階のひとつに母親の安心を得ることなど⁴⁾、様々な場面で安心という言葉が用いられている。

わが国では急速な少子化が進み、様々な少子化対策が推進されているが、この対策の中で「安心」という言葉は多用されている。2015年から開始された健やか親子21(第2次)⁵⁾では、切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策の目標として、「安心・安全な妊娠・出産・育児のための切れ目ない妊産婦・乳幼児保健対策の充実」が挙げられている。安心して子育てができる環境づくりが、育児支援において達成すべき重要な目標とされており、この「安心」に着目することが長年の目標を達成するための一助となると考える。

また、国内の育児に関する研究では、育児不安や困難感についての研究が行われてきた⁶⁾⁷⁾⁸⁾。一方、育児に関する肯定的な側面を捉えた研究として、幸福感⁹⁾、自信と満足感¹⁰⁾、肯定感¹¹⁾などが挙げられるが、これらの中には安心という概念を中心に置いた研究はみられない。母親の安心については、母親から頻りに聞かれる言葉でもあり、子育て支援に関する研究や育児支援対策に多用される言葉であるにもかかわらず、その明確化がされてこなかったのが現状である。

本研究は、子育て支援の中で多用されている「安心」を指標化することを目指し、国内看護文献で用いられて

Literature Review of ANSHIN —toward Mothers Raising Infant—

Takako Kobayashi

School of Human Nursing The University of Shiga Prefecture

2015年9月30日受付、2016年1月9日受理

連絡先：小林 孝子

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail : kobayashi.ta@nurse.usp.ac.jp

いる「安心」についてその概念を明確にすることを目的とする。概念の明確化により、看護職の行う支援の評価や子育て支援システムの評価指標の一助となることが期待できる。

II. 研究方法

分析の手順として、日本の社会・文化の中で用いられる安心について明確にした上で、国内の看護学領域において用いられる安心について分析を行った。

第1段階として、看護領域に限らず他の領域を含めた学際的な検索を行う必要があると考え、国立情報学研究所が提供している総合検索システムCiNiiを利用した。タイトルに安心を含む論文を1996年から2015年の20年間で検索すると、18470件であった。データ数が膨大であるため、このうち被引用件数が5件以上、要旨に安心という言葉が含まれるもの、入手可能であるものから12件を選び、さらに精読した上で安心の記述が不明瞭なものを除き、最終的に6件を分析の対象とした。また、概念分析の手法として一般の文献も含めることが有用であることから¹²⁾、公立図書館の一般図書の検索を行った。ハンドサーチにより安心に関する説明があるもの14件を分析の対象に加え、合計20件の文献を分析対象とした。

第2段階として、日本の看護における概念の使われ方を検討するため、データベースとして医中誌Webを使用した。キーワード「安心」をタイトル中に含み、検索可能な1977年から2015年までの原著論文および看護文献で検索したところ118件であった。さらに、要旨とタイトルを読み、安心が中心的なテーマとなっていると思われる文献54件を精読し、「安心」という言葉が用いられているがその記述が不明瞭なものを除き、合計22件の看護に関連する国内文献を分析対象とした。

また、先行研究の中に、安心の概念分析¹³⁾と尺度開発¹⁴⁾の文献がみられた。これらの文献では、英文献については看護学領域に関する文献を対象とし、reassuranceという概念が用いられていた。本研究では子育て中の母親の安心への適用を目指していることから、妊娠出産育児において用いられることの多かったsense of securityという概念¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾に着目している。また、先行の概念分析では、和文献は看護学領域の他に医学、心理学、社会学、教育学領域の文献が用いられ、尺度開発は一般成人と大学生を対象として開発されている。本研究では日本の保健医療システムを背景とし、看護職の行う支援や子育て支援の評価指標の一助となることを目指していることから、看護職によってもたらされる安心を中心的テーマとして探求することが必要であると考え、分析を行った。

III. 研究結果

1. 安心という概念の用いられ方

1) 辞典で説明される安心

広辞苑第六版¹⁸⁾では「心配・不安がなくて、心が安らぐこと。また、安らかなこと。」と記され、日本国語大辞典¹⁹⁾では、「①心が安んじること。気がかりなことがなくて、心が落ち着くこと。②心が安らかで心配のないこと。また、そのさま。③仏語では、信仰によって、心が不動の境地に達すること。④内心のくふうをすること。奥義に達するための心づかい。」と説明されている。

2) 佛教で用いられる安心

安心(あんしん)は現代社会で日常的に用いられる言葉であるが、歴史を遡ると、仏教の世界で安心(あんじん)という言葉が用いられている。岩波仏教辞典第二版²⁰⁾によると、仏教では、信仰や実践により到達する心の安らぎあるいは不動の境地を意味するとし、聖道門では自己への精神集中によってその境地を目指すものであるとし、浄土門では阿弥陀仏を信じて極楽に往生するための心の持ち方であるとしている。日英佛教語辞典²¹⁾では、Anjin 安心 a settled heart; faith; assurance; firm belief と説明されている。

安心とは、単に心が安らいでいること、心配や苦痛がなくなったことにより心が安らぐこと、不動であること、目指すもの・境地であり、そこに至るまでの心の持ち方など、多様な意味合いを持つ言葉であるということが示されていた。

3) 科学技術で用いられる安心

安心という言葉は、安全・安心として用いられることが多くみられた。神里²²⁾は、不安定な社会状況に対処するための一つのキャッチフレーズとして、1990年代より行政や社会の様々な領域で、安全・安心の確保という表現が多用されていることを示している。これは社会全体が複雑化し不安定化する中で、安全だけでは不十分であり、安全と安心の両方を確保しなければ十分な政策にならないという認識からきていると考えている。また、安全と安心は類似した側面はあるものの本質的には異なる価値を有している。安全には客観的性格があり公的な価値を持つこと、安心には主観的性格があり私的な価値を持つこと。安全に比べると無規定になりやすいと説明している。

安全基準を達成していても安心できないという現象もみられる²³⁾。安全は具体的な危険が物理的に排除されている状態であり、安心は危険のあるなしにかかわらず心配・不安がない主観的・主観的な心の状態である²⁴⁾²⁵⁾。

また、リスク認知の視点から、中谷内²⁶⁾も安心してし

まうと安全が失われることを示しており、リスク情報は不安をもたらすが、政府や企業などのリスク管理責任者への信頼により安心がもたらされることの重要性を示している。

さらに、社会の安全・安心を脅かす脅威が増大する時代背景から、安全学の構築を推進している村上²⁷⁾²⁸⁾は、安全とともに安心について論述している。まず、「安全学」とは、「安全—危険」の軸と、「安心—不安」の軸と、「満足—不足」の軸を総合的に眺めて、問題の解決を図ろうとする試みであり、不安はその反対概念でもある安心も含めて、定量的な扱いから大きくはみ出る世界であると述べている。人工物や人間—機械系に絶対安全はあり得ず、リスクアセスメントなどの安全を求める手法が進化する中、「安心を得る」ということはどういうことなのか大きな課題として残ることも示し、「安心」は人々が求める重要な目標であるとしている。

他に、都市計画の領域でも安全と安心という用語が頻繁に用いられている。安全と安心については使い分けが必要であり、その相違について、安全については物理的対応により得られる客観的指標であり限定的欲求である。安心は、心理的・精神的対応により得られる主観的指標であり、無限定的要求であると説明している²⁹⁾。

また、「安心」および「安全」という言葉から連想する事柄を質的に分析した結果では、「安全」は自分がおかれた場所の状況、モノやしくみを利用した対策によって身の回りに危険のない状態や危険から身を守るために備えている状態ととらえられており、「安心」は自分の行為や他者との相互関係によって心が落ち着き安定する状態や頼りになる存在がある状態ととらえられていることが明らかにされている³⁰⁾。

以上のことから、安全は具体的な危険から免れている物理的状态であり、安心は危険の有無にかかわらず得られる心の状態である。安心は他者との信頼関係によってもたらされ、主観的指標であり、人々が求める重要な目標であるといえる。

4) 社会心理学で用いられる安心

山岸³¹⁾³²⁾は、安心は安全と人への信頼により導かれるものであるとし、対人関係の視点から安心を捉え、日本の安心社会が終わりを告げ信頼社会が必要であることを示している。「安心」とは、相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の自己利益の評価に根差した部分であり、安心は社会的不確か性が存在しない状況についての認知であるとしている。つまり、例えば農村のような集団主義社会の中では社会システムが安心を保証してくれており信頼を必要としないが、都会のような個人主義的な社会では信頼を必要とすると述べている。

このように、現代社会で人々は様々なリスクにさらされており、安心して生活することに関心が寄せられている。安心は安全と人への信頼により導かれるものであること、過度な安心は安全を脅かすこと、安心は主観的であり、定性的なものであることがここでは示されている。

5) 精神医学で用いられる安心

精神分析において、サリヴァンSullivan³³⁾は、security operation は、自己組織の主な機能の一つとしている。security という用語については、心理臨床大辞典³⁴⁾では安全（安心）と表現され、サリヴァンの治療法を解説したChapman³⁵⁾の著書では、安心操作 という訳で表現されている。

Sullivan³³⁾は、人間の営為の目指す最終状態は、satisfaction と security であるとし、satisfaction は食物や睡眠への欲望のように身体的機制に密接に結びつき、security は行動や思考、社会秩序などに関係が深い人間の文化的装備に密接な関連があるとしている。人生の中では全てものが手に入るわけではないという失望を味わうことから、この失望により喪失感や孤立感を味わわずにすむように考え行動し予見する能力が発達するようになる。これがsecurityの追求であり、securityという最終状態をめざすということになると述べている。

以上のことから、安心 securityは個人の主観的判断に依拠するものであること、目指すものであること、人との関係の中で生じること、予測している状況と大きく異なる状況にならないと信じていることといえる。

6) 心理学で用いられる安心

心理学の領域では、情動 emotionの一つとして、relief という概念が扱われている。

安心または安堵と訳されている。Lazarus³⁶⁾は、ストレスと情動emotionについて論述し、15種類の情動を示しているが、その中にrelief が含まれており、relief とは困った状況や大きな脅威が現実とならなかったか、あるいは状況が好転したことを喜ぶ状態であり、不安や怒りなどのストレス情動状態にあっても、恐れていた結果よりも損傷が少ないことがわかれば、それに続いて起こるものとされている。

情動の心理学が科学的心理学の一研究領域として認知されるようになったのは、1990年代であるとされる。しかしながら、取りあげられる情動は否定的な情動が多く、これは否定的な情動に緊急性があること、実験心理学上では否定的な情動の方が刺激を起こしやすく測定しやすい面が指摘されており³⁷⁾、不快感情について下位概念に質的な区分がなされやすいが、快感感情では下位概念が混同されやすいことから、快感感情に関する研究の重要性が指摘されている³⁸⁾。

情動の分類や構造についての確定的な説はないといわれるが、共通する点として2つの次元を取り出すことができる。それは、情動の性質という側面からみた次元と強度から見た次元である。性質には、negative-natural-positiveや、快-不快という快適度などがあり、強度としては、strong-mild-weakといった活性度がある。relief は、positive mild に位置づけられている³⁷⁾。

また、安堵と安心については意味が類似するが、安心はより持続的な事態を表現し、安堵は瞬間的な事態を表現すると説明されている¹⁹⁾。門地³⁸⁾は安堵感について因子構造を明らかにしている。第1因子として緊張からの解放状況があり、何らかの緊張や不安が先行して存在し、その緊張や不安が解消されたときという状況であった。第2因子のやすらぎ状況は、緊張が必ずしも先行せず、いずれも穏やかでくつろいだ状況があった。

以上のことから、安心は情動のひとつであり、快不快のレベルで見ると快の情動であること、活性度から見ると中等度のレベルに位置づけられる。また、先行条件として不安や脅威が存在し、不安や脅威となることが軽減することによって安心がもたらされるとする側面と、先行条件がない状況の中でも安心がもたらされるという側面があるといえる。

7) 学際的にみた安心の特性

佛教、科学技術、社会心理、精神医学、心理学の文献から安心の記述内容を統合し、学際的な視点からみた安心の特性を表1に示す。

安心の特性として、《心が安らいでいる》《安定している》《信頼が築かれている》《安全が保障されている》《できると信じている》《求めるもの》《主観的なもの》というカテゴリーが明らかにされた。以下、カテゴリー名を《 》で示す。

《心が安らいでいる》とは、心配・不安がなく心が安らぐこと¹⁸⁾³⁹⁾、信仰や実践により到達する心の安らぎ²⁰⁾⁴⁰⁾とする内容が含まれていた。

《安定している》とは、いつもいる場所や暮らしている場所が安心の場となること³⁹⁾、心が落ち着き安定する状態³⁰⁾、社会的な不確実性が存在しない³¹⁾、信仰や実践により到達する不動の境地²⁰⁾という内容を含んでいた。

《信頼が築かれている》とは、安全・安心に関係する者の中で信頼が築かれる状態⁴¹⁾、相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中での自己利益の評価³¹⁾、リスク管理責任者への信頼により安心がもたらされる²⁶⁾ことなどを示していた。

《安全が保障されている》は、安全についての信頼であり安全の保障である²⁵⁾、安全を基にした主観的な感覚を保障しようとするもの²³⁾であった。

《できると信じている》とは、判断と選択の範囲を自

分の内に置き自己解決できることが安心の拠点となる³⁹⁾、何かあったとしても受容できると信じていること⁴¹⁾、脅威への対応方法を理解するという内容⁴²⁾などであった。

《求めるもの》とは、人々が求める重要な目標であり²⁸⁾、無限定的要求²⁹⁾などであった。

《主観的なもの》には、主観的性格があり私的な価値を持つ²²⁾、安心は個人の主観的な判断に大きく依存する⁴¹⁾、定量的なデータとして扱うことの上に乗切らない世界²⁸⁾、心配・不安がない主体的²⁵⁾・主観的な心の問題⁴³⁾、安心は主観的であり定性的なもの³¹⁾という内容が含まれていた。

3. 看護における安心

国内文献22件を分析対象とし、Rodgers⁴²⁾の概念分析の手順を参考に文献を検討した。Rodgers は、概念は時代や状況によって変化し発展すると考え、概念の使われ方や文脈に焦点をあて、概念の属性を明らかにしていく属性理論に基づいている。「安心」という概念は、看護実践の場や育児支援の場で日常的に用いられているが、曖昧なまま用いられており、概念の明確化を行う上でRodgers の概念分析が適していると考えた。

対象とした文献の内容を見ると、精神疾患患者への看護10件、周手術期の看護3件、在宅看護3件であり、他に救急外来での看護、認知症高齢者へのケア、高齢者の健康、小児へのケア、分娩期のケアという内容が含まれていた。子育てに関する文献はみられなかった。

対象文献では安心という概念が明確に定義されずに用いられているものが殆どであったことから、安心についての記述内容を文脈から読み取り、先行要件、属性、帰結という時間軸に沿って分類した。分析の視点として、対象者が感じる安心について説明されている内容を属性とした。次に、何によって安心がもたらされたのかについて説明されている内容を先行要件としたが、殆どが看護ケアや看護職の関わりとして記述されていた。また、対象者が安心を得ることによってもたらされるものには、対象者側だけではなく、看護職側にももたらされるものがあることから、看護職・対象者にもたらさせる結果とした。先行要件として分類できた看護職のかかわりを表2に、属性として分類された対象者が感じる安心を表3、そして帰結を表4に示す。

1) 看護職のかかわり

先行要件として分類された看護職のかかわりには、《信頼関係をつくる》《受容する》《そばにいる》《情報を提供する》《環境を整える》というカテゴリーが12件の文献から抽出された。

《信頼関係をつくる》とは、看護職と対象者の間での信頼関係の構築⁴⁷⁾⁴⁸⁾⁴⁹⁾⁵⁰⁾であった。

表1 安心の特性

特 性	内 容	文 献
心が安らいでいる	心配・不安がなく、心が安らぐこと。また、安らかなこと	広辞苑(2008) 18)
	心の平安、平穏が安心である	谷口(2002) 39)
	信仰や実践により到達する心の安らぎ	仏教辞典(1989) 20) ※1
	身体・心理・社会・霊的に心配・不安がなく心が安らぐこと	小島(2007) 40)
安定している	いつもいる場所や暮らしている場所が安心の場であり、日常が安心の拠点となる	谷口(2002) 39)
	心が落ち着き安定する状態	酒井(2003) 30)
	人が知識・経験を通じて予測している状況と大きく異なる状況にならないと信じていること	懇談会(2004) 41) ※2
	信仰や実践により到達する不動の境地	仏教辞典(1989) 20) ※1
	社会的不確実性が存在しない状況についての認知	山岸(1996) 31)
信頼が築かれている	安全・安心に関係する者の中で、社会的に合意されるレベルの安全を確保しつつ、信頼が築かれる状態	懇談会(2004) 41) ※2
	相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の自己利益の評価に根差した部分	山岸(1996) 31)
	政府や企業などのリスク管理責任者への信頼により安心がもたらされる	中谷内(2006) 26)
安全が保障されている	安心は安全についての信頼であり安全の保障である	久米(2005) 25)
	安全であること	中谷内(2006) 26)
	安心は安全を基にした主観的な感覚を保障しようとするもの	吉川(2006) 23)
できると信じている	判断と選択の範囲を自分内に置き、自己解決できることが安心の拠点となる	谷口(2002) 39)
	何かあったとしても受容できると信じていること	懇談会(2004) 41) ※2
	脅威への対応方法を理解する	長谷川(2009) 42)
	いざというときの心構えを忘れずそれが保たれている状態	懇談会(2004) 41) ※2
	自己への精神集中によってその境地を目指すもの	仏教辞典(1989) 20) ※1
求めるもの	無限定的要求である	児玉(2000) 29)
	人々が求める重要な目標である	村上(2005) 28)
	人が最も求めるのは幸せではなく安心である	加藤(2006) 44)
	心理的・精神的対応により得られる主観的指標	児玉(2000) 29)
主観的なもの	主観的性格があり私的な価値を持つ	神里(2004) 22)
	安心は個人の主観的な判断に大きく依存する	懇談会(2004) 41) ※2
	不安と安心は定量的なデータとして扱うことの上に乗っ切らない世界である	村上(2005) 28)
	安心は心配・不安がない主体的・主観的な心の状態	久米(2005) 25)
	安心は主観的であり、定性的なもの	山岸(1996) 31)
	心の状態	中谷内(2006) 26)
	安心は主観的な概念	吉川(2006) 23)
	相手に対する情緒的安定による主観的評価と安心感とは同義である	日景(2007) 45)
安心は主観的な心の問題	橋本(2007) 43)	
安心は安全対策に対する利用者等の主観的な感情	村山(2009) 46)	

※1 佛教辞典(1989)は岩波佛教辞典(1989)を示す
 ※2 懇談会(2004)は、安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会(2004)を示す

《受容する》とは、受動的態度で接することや⁵¹⁾、対象者の思いを受け入れ理解したことを示す⁵²⁾、一貫した受容⁵³⁾、共感⁴⁹⁾、共有⁵²⁾、傾聴⁴⁷⁾⁵²⁾などの働きかけが含まれていた。

《そばにいる》は、そばに寄り添い話を聴く⁵⁴⁾⁵⁵⁾、患者を出迎え常にそばにいる⁴⁸⁾、小児看護では子どもとともにいる⁵⁶⁾ という内容が含まれていた。

《情報を提供する》は、術前訪問での説明や手術室で行われる具体的な看護を知る⁴⁸⁾⁵²⁾、診察状況の情報提供⁵⁷⁾、具体的な知識を提供する⁵⁸⁾であった。

《環境を整える》には、安全な場所の提供と十分な休息⁴⁹⁾、リラックスした雰囲気⁵⁸⁾、アロマの香り⁵⁸⁾などが含まれていた。

表2 看護職のかかわり

カテゴリー	内 容	文 献
信頼関係をつくる	信頼関係	荒木ら(2009) 58)
	より良い信頼関係	高橋ら(2008) 48)
	看護者との信頼関係	宮川(2004) 49)
	看護師との信頼関係	佐々木(2006) 50)
受容する	受動的態度で接したことの相互作用	照井ら(1992) 51)
	患者の思いを受け入れ理解したことを示す	望月ら(1999) 52)
	手術の場で気持ちを共有する	望月ら(1999) 52)
	話に耳を傾けてくれた	望月ら(1999) 52)
	一貫した受容	山崎(2004) 53)
	看護援助のプロセス「共感しながら向かう」	加藤(2008) 56)
	共感的な関わり	宮川(2004) 49)
	傾聴する	荒木(1998) 47)
そばにいる	そばにいる	倉田(2001) 54)
	そばに寄り添い話を聴く	津田(2006) 55)
	患者を出迎え常にそばにいる	高橋ら(2008) 48)
	一緒についてきてくれる人がいる	荒木(1998) 47)
	子どもとともにいる	加藤(2008) 56)
情報を提供する	術前訪問での説明	高橋ら(2008) 48)
	手術室で行われる具体的な看護を知る	高橋ら(2008) 48)
	手術室での流れの説明	望月ら(1999) 52)
	診察状況の情報提供	荒川(2002) 57)
	具体的な知識を提供する	荒木(1998) 47)
環境を整える	安全な場所の提供と十分な休息	宮川(2004) 49)
	リラックスした雰囲気	荒木ら(2009) 58)

表3 対象者が感じる安心

カテゴリー	内 容	文 献
受け入れられている	隠さなくてもいい	北川ら(2002) 59)
	自分を受け入れてくれる、認めてくれる	高柳ら(1997) 60)
	自分は受け入れられているという実感	照井ら(1992) 51)
つながりがある	さまざまな機会や場所とのつながり	中村ら(2010) 61)
	昔から親密度の高い人とのつながり	中村ら(2010) 61)
	情報とのつながり	中村ら(2010) 61)
信頼できる人がいる	自分に対して何かしてくれる人だという実感	照井ら(1992) 51)
	自分の気持ちをわかってくれる人がいる	中村ら(2010) 61)
	自分の力を信じ受け止めてくれる信頼できる人との関係	小林ら(2010) 62)
	自分のことを分かってくれる	佐々木(2006) 50)
できる感覚がある	困った時にはいつでも戻れる	長沢(1992) 63)
	自己効力感の存在	中村ら(2010) 61)
	自分の体をやりくりできる	中村ら(2010) 61)
不安がない	大きな心配事や困りごとになっていない	中村ら(2010) 61)
	不安が解消されて落ち着ける	石山ら(2014) 64)

表4 看護職・対象者にもたらされる結果

カテゴリー	内 容	文 献
充足	充実感につながる	阿保ら(2013) ⁶⁵⁾
	ニードを満たす	山崎(2004) ⁵³⁾
回復	身体的な危機状態から脱する	北川ら(2002) ⁵⁹⁾
	精神症状の改善	津田(2006) ⁵⁵⁾
	不安な状況を乗り越える	荒木(1998) ⁴⁷⁾
安定	穏やかに過ごす	阿保ら(2013) ⁶⁵⁾
	在宅療養を早期に確実に安定させる	中村ら(2010) ⁶¹⁾
	自我の安定	山崎(2004) ⁵³⁾
関係性の構築	看護者との関係性が成立	高柳ら(1997) ⁶⁰⁾
	交流が円滑化	照井ら(1992) ⁵¹⁾
	患者看護師間の相互作用を引き出す	望月ら(1999) ⁵²⁾
	信頼感につながる	望月ら(1999) ⁵²⁾
	患者-看護師関係の構築	荒木ら(2009) ⁵⁸⁾
	信頼関係を築く	小林ら(2010) ⁶²⁾
	看護師への信頼の獲得	加藤(2008) ⁵⁶⁾
自立	自立に向けた行動がとれるまでに回復した	北川ら(2002) ⁵⁹⁾
	主体的な行動	加藤(2008) ⁵⁶⁾
	自立した行動	加藤(2008) ⁵⁶⁾
	自立へ向かう	山崎(2004) ⁵³⁾
	一人立ちを強めた	倉田(2001) ⁵⁴⁾
	自分の意志で食べる	小林ら(2010) ⁶²⁾
	自立に向かった主体的な行動変容	加藤(2008) ⁵⁶⁾

2) 対象者が感じる安心

属性として分類された対象者が感じる安心は、8件の文献から抽出された。《受け入れられている》《つながりがある》《信頼できる人がいる》《できる感覚がある》《不安がない》というカテゴリーに分類された。これは、対象者が安心と感じる状況や看護援助を受けて安心と感じていることとして表されていた。

《受け入れられている》には、隠さなくてもいい⁵⁹⁾、自分を受け入れて認めてくれる⁵¹⁾⁶⁰⁾という内容があった。

《つながりがある》には、さまざまな機会や場所とのつながり⁶¹⁾、親密度の高い人とのつながり⁶¹⁾、情報とのつながりなど⁶¹⁾、人とのつながりに限定されない社会的つながりが重要であることが示されていた。

《信頼できる人がいる》では、自分に対して何かしてくれる人だという実感⁵¹⁾、自分の気持ちをわかってくれる人がいる⁵⁰⁾⁶¹⁾、信頼できる人との関係⁶²⁾という内容であった。

《できる感覚がある》には、困った時にはいつでも戻れる⁶³⁾、自己効力感の存在⁶¹⁾、自分の体をやりくりできる⁶¹⁾であった。

《不安がない》には、心配事や困りごとになっていない⁶¹⁾、不安が解消されて落ち着ける⁶⁴⁾という内容が含ま

れていた。

3) 看護職・対象者にもたらされる結果

帰結として分類された看護職・対象者にもたらされる結果には、《充足》《回復》《安定》《関係性の構築》《自立》というカテゴリーに分類され、13件の文献より抽出された。

《充足》は、充実感につながる⁶⁵⁾、ニードを満たす⁵³⁾という内容であった。

《回復》には、身体的な危機状態から脱する⁵⁹⁾、精神症状の改善⁵⁵⁾、不安な状況を乗り越える⁴⁷⁾という内容が含まれていた。

《安定》は、穏やかに過ごす⁶⁵⁾、早期に確実に安定させる⁶¹⁾、自我の安定⁵³⁾であった。

《関係性の構築》では、看護者との関係性が成立⁵⁸⁾、患者看護師間の相互作用を引き出す⁵²⁾、看護師への信頼の獲得⁵²⁾⁵⁶⁾という内容が含まれていた。先行要件として示された《信頼関係をつくる》と類似した内容であったが、時間軸からみて安心と感じることによる帰結として表現されている内容を分類した。

《自立》には、自立に向けた行動がとれるまでに回復した⁵⁹⁾、主体的な行動⁵⁶⁾、自立した行動⁵³⁾⁵⁴⁾⁵⁶⁾、自立に向

かった主体的な行動変容⁵⁶⁾といった内容が含まれていた。

IV. 考 察

1. 安心をもたらす要因と看護援助

学際的な側面から安心を分析したところ、安心の特性として「心が安らいでいる」「安定している」「信頼が築かれている」「安全が保障されている」「できると信じている」「求めるもの」「主観的なもの」というカテゴリーが明らかにできた。一方、国内の看護実践の文献で示された先行要件として「信頼関係をつくる」「受容する」「そばにいる」「情報を提供する」「環境を整える」、属性として「受け入れられている」「つながりがある」「信頼できる人がいる」「できる感覚がある」「不安がない」、帰結として「充足」「回復」「安定」「関係性の構築」「自立」というカテゴリーが分類された。

共通するカテゴリーとしては、特性として示した「信頼が築かれている」、先行要件である「信頼関係をつくる」、属性である「信頼できる人がいる」、帰結である「関係性の構築」であった。看護実践においては、看護職と対象者間の信頼関係は安心をもたらす要因となり、安心を構成し、安心の結果としてさらなる信頼をもたらすという時間軸の中で循環するものであり、看護援助を提供する上で重要な要素となると考えられた。

特性として示した「できると信じている」と属性の「できる感覚がある」については、自分で解決することや備えができることを表していた。「できる」と思える体験がある母親と「できる」と思える体験がない母親がいることから⁶⁵⁾、いざという時の心構えや対応方法を理解しておくこと、看護職の関わりとして具体的な手順や情報を提供するという働きかけは、対象者のできるといふ感覚につながっていくものと考えられた。

また、親になるプロセスとして3年間母親の追跡研究をした研究では、母親はポジティブな出来事を感じし、自分自身のポジティブな側面に注目することができるようになり、それは遅くとも3か月から6か月の間に起こることが明らかにされている⁶⁷⁾。positive mildな情動³⁷⁾に位置づけられる安心に着目したアプローチが効果的な支援となり得ると考えられる。

2. 子育て中の母親への適応

国内での子育て中の母親の心理社会的側面からの研究では、育児不安という概念の他、肯定的側面からもその詳細や支援についての研究が積み重ねられている。育児不安という概念については曖昧なまま多様な意味合いで用いられる状況から、いくつかその言葉の定義がされており、「育児不安の本態は育児困難感であり、育児困難

感とは、育児への自信のなさ、困惑と子どもへのネガティブな感情、態度からなる心性である⁶⁸⁾、「子育てに適切にかかわれないほどに強い不安を抱いている状態⁶⁹⁾」という記述が挙げられる。

育児に関する肯定的な側面を捉えた研究では、清水⁹⁾が母親の育児幸福感の尺度開発の研究の中で、育児幸福感の下位概念として安心を取りあげていた。この研究では、育児中に感じる肯定的情動を育児幸福感とし、Lazarusの理論に基づき、安心、希望、愛情、喜び、感謝、同情、誇りの7項目の総称を育児幸福感と定義し、プログラムを開発している⁷⁰⁾⁷¹⁾。しかし尺度の構成因子に安心という言葉は含まれていない。

子育て中の母親に関して、安心を中心的テーマとした国内の研究はみられなかったが、スウェーデンにおいてPerssonらの一連の研究を挙げることができる。スウェーデンでの早期退院（出産後26時間以内の退院、通常は72時間後に退院）に関連する出産後の親の安心に関して測定尺度の開発に至る研究が行なわれている。早期退院を選択した両親の経験に影響する要因を明らかにするためにグラウンデッドセオリー法を用いて、安心sense of securityがコアカテゴリーとなることを見だし¹⁵⁾、尺度開発も行っている¹⁶⁾。この尺度は、看護職からの支援感、一般的ウェルビーイング感、家族の親和感、母乳栄養のマネージメント感を下位概念としている。さらに、産後1週の母親の安心感に影響する要因には、スタッフからの支援（個人に応じている、適切な情報提供、産後の生活に備えられる、質問できる人がいる）、家族からの支援（身近にパートナーや重要他者がいる）、その女性と子どもの能力と健康（母と子のそれぞれのリソース、母親自身の身体的健康が良好である、退院後の子どものフォローアップがある）という要因があることを明らかにしている¹⁷⁾。これら一連の結果から、出産後早期の安心は、看護職からの支援感、家族の親和感、ウェルビーイング感、母乳栄養のマネージメント感の4因子で構成され、看護職や家族からの支援とその女性の健康状態や能力に影響を受けていることが示されている。

本研究の看護における安心の先行要件としては、看護職のかかわりのみであった。しかし、Perssonらは、看護職からの支援の他に、家族からの支援、身近な重要他者の存在、産後の身体状況や母乳育児、子どものフォローアップ体制などからも影響を受けていることが示されており、多様なアプローチが安心につながっているとされている。これらの結果は、出産後の安心に限定されるが、産後から継続する子育て支援を評価する上でも重要な視点である。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究の看護における安心については、タイトル中に安心が含まれる原著論文を分析した結果であり、看護学領域すべてを反映しているとは言い難い。特に、子育て支援においては、タイトル中に安心を含めた論文はみられなかったことから、本研究の結果をそのまま子育て支援に活用するには限界がある。分析対象範囲を拡大することや、実践の場からの対象者の声を反映させるなどの分析を加える必要がある。

また、安心の特性として示された「心が安らいでいる」>>「安定している」については、国内の看護実践の文献ではほとんど記述されておらず、自明のこととして説明がされていないことも考えられた。Andersson-Segesten⁷²⁾は、安心は内的な側面と外的な側面を持つことを示し、内的側面とは平穏であったり信頼できたり調和がとれているときに現れる感情や状態、外的側面とは物質的な安全や環境的な安全、対人関係、状況対応への自信などとしている。内的側面は個人に内在し、外的側面と比較すると明瞭に表すことが難しい面も考えられる。しかしながら、Kolcaba⁷³⁾が comfort理論を開発した際、看護援助のアウトカムとしての定義づけを行ったように、安心という言葉が看護の場において用いられ、対象者からも頻りに聞かれる言葉でもあることから、看護援助のアウトカムとして定義づけられ説明できることが必要と考える。

V. 結 語

看護実践の文献においては、看護職と対象者間の信頼関係、対象者ができると思える関わりが重要であることが示されていた。母親のポジティブな側面のひとつとして安心に着目した働きかけを行うこと、看護援助のアウトカムとして定義づけられることが必要と考えられた。概念を明確化することにより、看護職の行う支援や子育て環境を評価する指標の開発へと発展させていくことが期待できる。

文 献

- 1) 吉田孝子：育児相談における母親のニーズと保健婦の役割，大阪府立看護大学紀要，6(1)，51-58，2000.
- 2) 千葉千恵美，細川美千恵，新井基子他：子ども・家族支援センターのプレママ教室における妊婦への評価，高崎健康福祉大学紀要，(14)，83-90，2015.
- 3) 頭川典子，安田貴恵子：育児の悩みを話し合うグループに参加した3人の母親の経験，日本地域看護学会

- 誌，13(2)，38-45，2011.
- 4) 大西竜太，深川周平，石間のどか他：新生児家庭訪問における信頼関係構築 母親の反応に対する保健師の判断を通して，日本地域看護学会誌，15(1)，89-98，2012.
- 5) 厚生労働統計協会：国民衛生の動向・厚生指標増刊・第62巻第9号，113，厚生労働統計協会，東京.
- 6) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援，173-179，2006，名古屋大学出版会，名古屋.
- 7) 佐藤厚子，北宮千秋，李相潤，面澤和子：保健師・助産師による新生児訪問指導事業の評価育児不安軽減の観点から，日本公衆衛生雑誌，52(4)，328-337，2005.
- 8) 恒次欽也，庄司順一，川井尚：いわゆる育児不安に関する調査研究(2)：最新版質問紙による「育児困難感」の規定要因に関する研究，愛知教育大学研究報告 教育科学，49，125-132，2000.
- 9) 清水嘉子，関水しのぶ，遠藤俊子他：母親の育児幸福感 尺度の開発と妥当性の検討，日本看護科学学会誌，27(2)，15-24，2007.
- 10) 前原邦江，森恵美：産褥期における母親役割の自信尺度と母親であることの満足感尺度の開発 信頼性・妥当性の検討，千葉大学看護学部紀要，27，9-18，2005.
- 11) 島田真理恵，恵美須文枝，長岡由紀子：産褥期育児生活肯定感尺度改訂に関する研究，日本助産学会誌，16(2)，36-45，2003.
- 12) Beth L. Rodgers， Concept Analysis An Evolutionary View， (Beth L. Rodgers & Kathleen A. Knafel: Concept Development in Nursing second edition, 77-102, 2000, Saunders, Philadelphia.
- 13) 岩瀬貴子，野嶋佐由美：安心の概念分析，高知女子大学看護学会誌，39(1)，2-16，2013.
- 14) 岩瀬貴子，野嶋佐由美：安心の尺度開発 信頼性と妥当性の検討，高知女子大学看護学会誌，40(2)，81-91，2015.
- 15) Persson E. K. & Dykes A. -K: Parents' experience of early discharge from hospital after birth in Sweden, Midwifery, 18, 53-60, 2002.
- 16) Persson E. K., Fridlund B. & Dykes A. -K: Parents' postnatal sense of security (PPSS): development of the PPSS instrument, Scandinavian Journal of Caring Sciences, 21, 118-125, 2007.
- 17) Persson E. K. & Dykes A. -K: Important variables for parents' postnatal sense of security:

- evaluating a new Swedish instrument (the PPSS instrument), *Midwifery*, 25, 449-460, 2009.
- 18) 新村出: 広辞苑第六版, 2008, 岩波書店, 東京.
- 19) 小学館国語辞典編集部: 日本国語大辞典第一版第一巻, 557, 2000, 小学館, 東京.
- 20) 中村元, 田村芳朗, 末本文美士: 岩波仏教辞典第二版, 22, 1989, 岩波書店, 東京.
- 21) Hisao Inagaki: 日英佛教語辞典, 8, 1984, Nagata Bunnshodo, Kyoto.
- 22) 神里達博: 序論「安全・安心」言説の登場とその背景, *科学技術社会論研究*, 3, 72-84, 2004.
- 23) 吉川肇子, 武村和久, 藤井聡: 第5章安全から安心へ(堀井秀之編) *安全安心のための社会技術*, 287-289, 2006, 東京大学出版会, 東京.
- 24) 金子毅: 「安全」と「セーフティ」をめぐる語源的考察「安全安心社会」の実現に向けての文化試論, *埼玉大学紀要 教養学部*, 45(2), 23-32, 2010.
- 25) 久米均: 今なぜ安全・安心か, *学術会議叢書 8 食の安全と安心を守る*, 10-18, 2005.
- 26) 中谷内一也: リスクのものさし *安全安心生活はありうるか*, 236-244, 2006, 日本放送協会出版, 東京.
- 27) 村上陽一郎: *安全学*, 192, 1998, 青土社, 東京.
- 28) 村上陽一郎: *安全と安心の科学*, 36-38, 2005, 集英社新書, 東京.
- 29) 児玉桂子・小出治編著: *新時代の都市計画第5巻 安全・安心まちづくり*, 2-13, ぎょうせい, 2000.
- 30) 酒井幸美, 守川伸一, Hafsi Med他: 原子力発電所に対する安心感の構造—「安心」のイメージに関する調査をもとに, *原子力安全システム研究所INSS JOURNAL*, 10, 10-21, 2003.
- 31) 山岸俊男, 渡部幹, 林直保子他: 社会的不確実性のもとでの信頼とコミットメント, *社会心理学研究*, 11(3), 206-216, 1996.
- 32) 山岸俊男: *安心社会から信頼社会へ*, 21, 1999, 中央公論新社, 東京.
- 33) Harry Stack Sullivan (著), 中井久夫, 山口隆(訳): *現代精神医学の概念*, 22-23, 1976, みすず書房, 東京.
- 34) 氏原寛, 東山紘久, 山中康裕他: *心理臨床大辞典*, 999-100, 1992, 培風館, 東京.
- 35) Chapman AH (著), 作田勉監(訳): *サリヴェン治療技法入門*, 65, 1979, 星和書店, 東京.
- 36) Lazarus RS (著), 本明寛(訳): *ストレスと情動の心理学 ナラティブ研究の視点から*, 263, 実務教育出版, 東京, 2004.
- 37) 今田寛: *情動研究の最近の動向を探る*, 感情心理研究, 9(1), 1-22, 2002.
- 38) 門地里絵, 鈴木直人: 状況からみた安堵感の因子構造—緊張からの解放とやすらぎ, *心理学研究*, 71(1), 42-50, 2000.
- 39) 谷口正和: コンセプトは「安心」—急拡大する自己防衛市場, 23-36, 2002, 東洋経済新報社, 東京.
- 40) 小島操子: 第1回高知大学看護学会特別講演 *安心を創る看護実践*, *高知大学看護学会誌*, 1(1), 41-50, 2007.
- 41) *安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会: 「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会」報告書*, 6-8, 2004.
- 42) 長谷川文雄: 未来からの脅威—ゆらぎ始めた暮らしの安心・安全, 100-122, 2009, NTT出版, 東京.
- 43) 橋本直樹: *食品不安—安全と安心の境界*, 84, 178-180, 2007, 日本放送出版協会, 東京.
- 44) 加藤諦三: *不安の心理 安心の心理*, 6-7, 2006, 大和書房, 東京.
- 45) 日景奈津子, 村山 優子: 情報セキュリティ技術に対する安心感要因の考察, *情報処理学会研究報告*, 16, 333-338, 2007.
- 46) 村山優子, 藤原康宏: *トラストの感情としての安心 およびその要因について*, *日本信頼性学会誌*, 31(1), 41-46, 2009.
- 47) 荒木佳子: *開心術患者が術前の不安な状況を乗り越えていくための安心感につながる看護とは 患者-看護婦関係における信頼についての一考察*, *神奈川県立看護教育大学校事例研究集録*, 21, 1-4, 1998.
- 48) 高橋ひろみ, 坂本早苗, 三野圭子他: *安心提供に向けての取り組み 術前訪問の内容の検討*, *パンフレットの改善を試みて*, *岩見沢市立総合病院医誌*, 34(1), 35-39, 2008.
- 49) 宮川弘一: *思春期危機症患者との治療的信頼の一考察 回復過程における安心と信頼の効果*, *日本精神科看護学会誌*, 47(2), 182-186, 2004.
- 50) 佐々木ルミ: *患者-看護師の信頼関係の発展が患者の行動変容を促進する 入浴を拒否する統合失調症患者への安心感がもたらす効果について*, *全国自治体病院協議会雑誌*, 45(4), 135-136, 2006.
- 51) 照井レナ, 宮越不二子, 福田光子: *対人恐怖のある精神分裂病患者の看護 支持・安心を与える接触*, *クリニカルスタディ*, 13(10), 951-956, 1992.
- 52) 望月俊江, 佐藤ちあき, 辻稔他: *看護婦の術前訪問の関わりが手術患者の安心感に及ぼす影響*, *オペナーシング*, 14(2), 193-196, 1999.
- 53) 山崎良子: *退行により不安を表出する患者への看護 母性的関わりによる安心感獲得への援助*, *日本精神科看護学会誌*, 47(1), 41-44, 2004.

- 54) 倉田みゆき: 強い不安から対人距離を保ちにくい分裂病児への看護 安心感を提供する患児・看護婦間の心理的距離を考える, 日本精神科看護学会誌, 44(1), 348-351, 2001.
- 55) 津田優: 急性期における青年期患者への安心感を与える看護援助 青年期危機的状况から統合失調症を発症した事例を通して, 日本精神科看護学会誌, 49(2), 153-157, 2006.
- 56) 加藤令子: 痛みを伴う治療や検査を受ける年長幼児への「伝え方」に関わる看護援助 子どもが"安心"していただける関わりとは, 日本看護科学会誌, 28(3), 14-23, 2008.
- 57) 荒川真由美, 齊藤孝子, 大高洋子他: 救急外来において安心して待つことができる言葉かけの効果, 西尾市民病院紀要, 13(1), 125-130, 2002.
- 58) 荒木菜穂子, 松野淳子, 角野仁彦: 認知症高齢者に対する安心感をもたらす看護 アロマセラピーを介したコミュニケーションをとおして, 日本精神科看護学会誌, 52(2), 484-488, 2009.
- 59) 北川理絵, 中井珠美, 伊藤琴美: 症状外在化に焦点を当てた摂食障害患者の看護 安心感を与えることの意味, 日本精神科看護学会誌, 45(2), 282-286, 2002.
- 60) 高柳七子, 伊藤あや子: 人格障害を伴う摂食障害患者の看護 本人の安心できる治療的環境について, 日本精神科看護学会誌, 40(1), 156-158, 1997.
- 61) 中村順子, 木下彩子, 阿部範子他: 日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要, 14, 9-16, 2010.
- 62) 小林由起子, 安達洋子: 看護師-患者関係における安心感の保障 長期入院患者の自尊感情を高めるかかわりの一事例, 日本精神科看護学会誌, 53(1), 252-253, 2010.
- 63) 長沢つるよ: 生をたたかう患者と家族を支える 在宅療養移行時の家族への対応 安心感につながる援助を, Nurse eye, 5(9), 19-23, 1992.
- 64) 石山恵子, 齊藤充: 隔離中の患者に安心を与える看護師のかかわり 保護室入室経験のある患者から聞く思い, 第21回日本精神科看護学術集会専門I看護研究論文, 日本精神科看護学術集会誌, 57(2), 45-49, 2014.
- 65) 阿保友里佳, 坪井桂子, 川崎陽子他: 介護老人保健施設における重度認知症高齢者と家族が安心感を得るための看護援助の検討 コミュニケーションノートを用いた家族関係の調整に焦点を当てて, 日本看護学会論文集: 老年看護, 43, 70-73, 2013.
- 66) 小林康江: 産後1ヶ月の母親が「できる」と思える子育ての体験, 母性衛生, 47(1), 117-124, 2006.
- 67) 氏家達夫: 親になるプロセス, 220-245, 1996, 金子書房, 東京.
- 68) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子他: 育児不安に関する臨床的研究-5-育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成, 日本子ども家庭総合研究所紀要, (35), 109-143, 1998.
- 69) 大日向雅美, 育児不安こころの科学, 9-15, 2002, 日本評論社, 東京.
- 70) 清水嘉子, 遠藤俊子, 松原美和他: 子育て期をより幸福に過ごすための母親の工夫とその効果, 日本助産学会誌, 21(2), 23-35, 2007.
- 71) 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子: 母親の育児幸福感を高めるプログラムの実施と評価, 日本看護科学会誌, 29(1), 41-50, 2009.
- 72) Andersson-Segesten K: Patients' experience of uncertainty in illness in two intensive coronary care units, Scandinavian Journal of Caring Sciences, 5(1), 43-7, 1991.
- 73) Katharine Kolcaba (著) 太田喜久子 (訳): コルカバ コンフォート理論 理論の開発と過程と実践への適用, 1, 2008, 医学書院, 東京.